

## 議長記者会見（第8回）会見録



日時：平成24年6月29日（金）  
午後2時00分～2時25分  
場所：県議会議事堂 議長応接室

記者会見を行う山田(憲)議長(右)と宮下副議長(左)

### 1 発表事項

山田(憲)議長： それでは、恒例となっております議会終了後、議長が記者会見をするということになっておりますので、前例にならって始めたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### ○ 今議会を振り返って

まず、今議会を振り返ってということであります。

私にとっても最初の議会でありましたので、大分緊張しながら、まずは円滑な議会運営になるように努めたところでありますけれども、改めて議長としての重責に思いを新たにしたところであります。

本会議では、いわゆる志賀の原子力発電所の安全確保や、地震・津波などの防災対策、核燃料税の新条例の制定に関する事、また、北陸新幹線のフル規格整備と開業PR、小松空港の活性化、さらには能登空港の搭乗率の目標達成に向けた取り組みなどがあげられると思っております。

各議員からの質問も、こうした課題に集中したところでありますけれども、議会としての意思、考え方が知事、執行部に十分伝わったのではないかと感じているところであります。

加えて、今日ちょうど認可が下りましたけれども、「北陸新幹線のフル規格による早期完成に関する意見書」など、12本の意見書を可決したところでもあります。

○ 広報広聴会議について

次に、議会の広報広聴についてであります。

これまでも、いわゆる議会が活発な情報公開を含めてやろうということでやってまいりました。それが、今年度から議会の広報紙『議会だより』ということで、『ほっと石川』も年4回発行しておりますから、『議会だより』も年4回発行するというようにしております。第1回目が7月末に発刊となっております。順番に議会に関する情報とか、いろんなことを積極的に発信しながら、幅広い世代の方々に関心を持っていただくことにつながれば幸いなというふうに思っております。

また、議会の、いわゆる海外との交流が増えたりしましたものですから、3カ国語をまとめた、議会を紹介するパンフレットを作ったところであります。広く外国にもお知らせしていこうというふうに思っております。

○ 議会改革について

次に、議会改革であります。

議会改革につきましては、特に、この当初議会から、いわゆる予算特別委員会、これを常任委員会化するというように『予算委員会』といたしました。

2月定例会は1人60分という形でありましたが、この6月からは初めての試みでありましたが、1人30分ということでやってきました。「概ねよかった」という声と「少し短かったな」という声があります。ただ、なんとかこの方式を1年間やってみるということも必要かなと思っておりますけれども、今後とも改革会議の皆さん方にも検討していただきながら、直すべきところがあれば直すと。おおむねよかったのかなというふうに思っております。

○ 北陸3県議会議員研修会について

最後に、昨年の10月に3県の議長会がありまして、自分たちの、北陸3県が独自にといいますか、特色をあげながら勉強会をすればどうか、共通する問題であれば、新幹線であったり、原子力発電所であったり、いろいろあるのですけども、そういったことを3県の議員が全部寄って、交流・勉強していくということに決しておりまして、石川県がたまたま幹事県ということになっておりますので、今年は石川県で秋に開催をして、そして、最初でありますので観光を一つのテーマにして、広域交流をテーマにした議題で研修会をやりたいというふうに思っております。少なくとも新幹線ができましたので、3県が連携できて、大いに発信できるようなそういうような機会にできればいいなと思っておりますので、よろしくお願ひします。

私の方からは、以上であります。

#### 4 質疑応答

記者：秋の勉強会というのはいつごろ。

山田(憲)議長：富山の知事選がおそらく10月の終わりぐらいだというふうに、まだ決定しておりませんから。できれば11月の初め頃にできればなと思っております。

記者：今日、敦賀延伸の認可が正式に決まりましたので、改めて、議長、加賀の立場で、それから、副議長、能登の立場でコメントをお願いします。

山田(憲)議長：3年後、26年度末金沢ということは決定しておりましたから、まずは金沢までというのは前提条件でありますけれども、我々の気持ちからすれば、加賀までいかなければやっぱりまだ物足りないなということがあったものですから1日も早くというのがありましたので、ここにきて認可がおりた、大分遅れましたけれども、ようやくであります、認可がでたうちは、1日も早い、13年後とは言われておりますけれども、1日も早い完成、そしてまた、大阪までの、どうしてもこれはやっていただきたい。幸いに関西の広域連合も経済界も北陸新幹線は大事だと言ってくれていますので、また、まさしく災害時の代替補完としての北陸新幹線が認められつつあるので実現も不可能でない、いい方向に進んでいるなと思っております。

宮下副議長：私もよかったなと思っております。私ども能登に住む者にとっても、新幹線、金沢から能登の方に来るかはどうかわかりませんが、少なくとも私は、高岡で能越を通過して能登へ、そして、帰りは能登をしっかりと見ていただいて金沢を見学、また、加賀の方へも足をのばしていただいて、金沢駅なり小松空港から帰っていただく、そんなことを本当にこれからしっかりと応援していかなければならないのではないかと考えております。何はともあれ新幹線がそういう結果になったということに能登の住民としてもうれしく思っております。

記者：今回、県議会の方で情報公開の推進ということで定例会毎に記者会見ということをやられていますが、一方で、県政の両輪と言われている執行部の方は、未だに定例という形で記者会見をやっていないんですけれども、これについては、議長はどう思われますか。

山田(憲)議長：それは私から言うのはどうかと思いますが、今までの知事の発言から見ても、今日もやっていたようなんですけども、結構フランクに質問に応じながらやっているというのは逆に言えばそれもありかなと。そんな認識でして定例でやるということだけでなく、タイムリーにやるということもありじゃないかな。そういうことはあってもいいのかな、と私は個人的にはそう思う。

記者：ちょっと質問が戻って、新幹線関係なんですけど、次に次についていうとあれなんですけど、大阪まで繋がらないと意味がないという共通認識だと思うんですけど、これからの進め方なんですけど、新潟さんとかだと北陸新幹線が福井とか行くと自分のところが終わっているんで、知事の考えもあるとは思いますが温度差ができてくるとか、今後、大阪まで繋ぐというふうになると、本当のフル規格で

やると、滋賀県の知事をどう説得するかとか、重要なことがあると思うのですが、そのあたりの議会との連携とか、関西広域連合だけじゃなくて、積極的に議会同士で、もう少し、例えば、西の方の議会と連携するとかそういう考えとかおありでしょうか。

山田(憲)議長：まさしく、今までは敦賀までで、それから先は見えなかったからあれなんですけど、もはやもう米原というより大阪まで来たから、方向が見えてきたということになれば、これからは関西の人たちとの連携をやっていかなければならない。北陸自動車道ができた時に、まさしく大阪、関西の奥座敷が加賀温泉として、北陸自動車道が活用されてきた。今度は、新幹線ができることによって、もう一度、関西と北陸の連携、これをもう1回皆さん再認識したのではないかな。もちろん災害もあるからね。ですから、そういう意味で、連携はもっとやりやすくなるのではないかな。方向性が定まってきたというかな。

記者：今、国交省なんかは試算でフリーゲージが一番何ももめなくていいということなのかわかりませんが、フリーゲージでという話になって、あくまでも暫定措置だと県の方は回答していますけども、JR西日本に対してももっともって例えば議会側からもちょっとなんとかという話をですね。例えば、富山ー大阪でフリーゲージを結ばれちゃうと石川も新幹線はなかなか走れなくなってしまう懸念されてしまいますので。

山田(憲)議長：今度の場合も敦賀まで14年か、それから、北海道が24年か。それ全部終わらないと次にかからないという、ある意味で言えば、その10年でもうタイムラグができていくわけだから、今のスケジュールでいくとそういう言い方かされない。そうすると、暫定というか、そういうのが出てくるんだろうけども、これからようやく認可が出てきた中で、まさしく関西との盛り上がりができることによって、その時間差を縮める、それが、まさしく暫定としてのフリーゲージがどこまで、もうなくてもいいやという盛り上がりになるのか、続けて着工することになれば一番そういうことにならない。逆に言えば、フリーゲージに対する投資なんかをフルの方に回すということになればもっと現実味を帯びるかなと。だから、我々としてはフルで早くというのが皆さんの思いだから、一旦立ち止まることのないようになんとかしてほしいな。

記者：この間、22年度の政務調査費で違法な支出があるんじゃないかということで提訴されていましたがけれども、それをどう受け止められていますか。

山田(憲)議長：初めてそういうことになったということで、まだこちらにきちっと来ていないものだから、どうこう言うことはないんですが、一応、我々も監査委員に精査してもらいながら、一定の評価を聞いておきながら、見解の相違というか、そういうことになりました。今後はそれを見ながら、粛々とやっていくしかないのかなというふうに思っております。

記者：あえてお聞きするんですけど、昨年度、全国の都道府県議会で海外視察を行ったのは、調べてみたら11都道府県ですか、かなり減ってきたという印象を受

けたんですが、是非はともかくやめた都道府県議会のほとんどは厳しい財政状況を踏まえと言われているんですけども、行く以上はそれなりの成果を県民に還元する方向を考えるべきかなと思いますし、あとは行く、行かないの議論があってもいいかなと思いますが。

山田(憲)議長：今までも議論がありました。それから、議運等の中でもやってきました。ただ石川県議会とすれば、海外に目を向けながら、地方の時代と言われながら、見習うべきところは多くあるだろうということで、海外の取り組み状況を見てくる、これはやっぱりある意味では資料で調べればわかるというのなら、他県を見習えばいいんでね、そこに肌で触れて、実際のところを聞くという意味で言えば、まさしく自分たちが地方の時代にふさわしく向かっていくためにはそういう研修というのがあって私は然るべきだ。形としてどういうふうに生かすか、生かさないのか、議会議場でも議論がありますけども、それは執行部が行っているのはいいんですけども、見聞を広めるということは大事なことだ。

記者：なかなか難しいですね。成果を目に見える形にするのは。

山田(憲)議長：ただやっぱり世界遺産の取り組みとかそういうものもあるでしょうし、私も去年はドイツに行って、原発問題とか自然エネルギーの問題とか見てきました。ドイツの考え方もあれば、フランスの考え方もあったりしますけども、良いこと悪いこと、これは片方で日本での議論でなくて、世界レベルで考えることでもあるとするならば、行ってきたことはやはり役に立っている。ましてや、ドイツの人たちの評価でいくと、「日本人はまさしくパニックにならなくてきちんとやっている姿はすごいな」とか、「日本の技術力で克服して欲しい」とか、そんなことを聞かれると、改めて日本の技術立国としての問題というのは、もっともっとがんばる必要が本当はあるのかな。何も全部反対という意味でなくて、もっと前向きな話があってもいいなということをおの脱原発と言いながらもそういう意見が聞けたということもありましたし、いろんな意味で当てはめるだけでなく、いろんな幅広い考え方を持つには、やはり海外、日本だけでなく、海外に行った利点があるんじゃないかな。

記者：知事は先日、原発の安全確保とかについて、全部国が責任を負ってやるべきだとか、この前は、安全確保とかについては県ではチェックしきれないとか、そういう趣旨のことを発言されていますが、安全確保・確認することについて県でできないとお考えですか。

山田(憲)議長：それは相当難しいと思います。ましてや、立地条件とかいろんなものが関わってくるでしょう。いろんなものが関わってくるから、より専門性をもってやらないと、建物の中のことならばすべて一致しているけど、自然条件とかいろんなことを含めて、総合的見地からするとそんな単純にできるものではない。ですから、ここはあえて国に責任というよりも、責任を押しつけるんでなくて、あえて国がもっと前向きにどんどんと原子力の問題、放射能の問題を含めて、本当にどうなんだということをやってくれないと、私はそう思う。これを素人でやっ

て、素人判断って訳にはいかないのです。

記者：国が安全だというなんらかの回答を言ったとしますね。その時に国が言うんだから安全だという態度になるのか。それとも、それをさらにチェックしていこうという態度になるのか、だいぶ違ってくると思うんですけども。

山田(憲)議長：だから、国の言う安全、今、信頼がないという問題がある中で、こういう中で、国がやっぱり信頼を持てるようにしっかりとしたことをやってもらう。そしてまた、もう一方では住民合意というのがある。住民合意と技術的見地がしっかりするということ、二つが成って初めて再稼働になってくる。その住民の合意、安心だと言えるだけの合意というものはそれだけしっかりした説明をしてもらうということになるんだろう。今、これをまさしく保安院なんかでも大丈夫だと思っていたから。じゃあ、石川県で全部やれといったらもう持たない。県で専門的分野をもってやろうとしたら。私も知事の言っていることは、はじめ変に、なんでも国にかついているというふうにとっていた部分もあるけども、そうでなくて、国が責任を持ってやるという、もう一步踏み込んでやるという意識を持ってほしいというのが、私はそういうふうにとらえている。

堅苦しく言っているけども、原発の問題はある意味では克服するというのが大事なことです。広島・長崎で原爆が落ちたことによって、それでもなおかつ、それを安全上処理して、ここまで原子力がきたが、事故があった。もう一度本当は克服して、そして、大丈夫だと言えるふうに日本の技術が世界に誇れるようになってほしいな、安全だと言えるレベルになってほしいなと、前向きに考える意味でね。それができるか、できないかが、再稼働なり、いろんなことの問題になってくるんでしょうけど。(終了)